

## 特集 民児協のあり方と福祉と人の生き方を問い続ける

～民児協のあり方検討委員会からのラストメッセージ～

### インフォメーション

令和7年度事業報告・収支決算…………… 5

春の褒章・叙勲 …………… 7

おすすめ書籍「ブックレビュー」…………… 8

### エッセイ：ひとをつなぐ

「⑩長丁場もなんのその」…………… 8

# 民児協のあり方と

## 福祉と人の生き方を問い続ける

「民児協のあり方検討委員会からのラストメッセージ」

令和9年度に迎える

民生委員制度創設110周年記念事業の

準備に着手するために、

令和2年度から始めた

検討委員会による取り組みを、

一旦休会することとなりました。

検討委員会からの答申は、

これまで道民児連事業の発展に

大きく寄与してきたことは

言うまでもありません。

このたび、各委員から、

これまでの6年間を振り返っての

感想や提言をいただきました。



■最後の答申を終えて

3月18日、民児協のあり方検討委員会が開かれ、最後の答申について協議し、次に示す6つの提案をしました。①研修事業のPR動画の作成。②市町村民児協独自の活動マニュアル作成の促進。これは室蘭市民児協の「活動参考書」を参考にした活性化事業モデルです。③民児協交流研修のあり方の体系化。令

和5年度に答申された交流研修事業をさらに発展させたもので富良野市民児協での視察受け入れ後を踏まえたリフレクションを参考に、体系化と普及を見ずえました。④民生委員の自薦の仕組みに関する調査研究。⑤民生委員児童委員（以下、「民生委員」）活動の持続可能性や人材確保に向けた課題と提案。なりて不足問題への取り組みに顕著な成果を上げている音更町民

児協などの事例を集積し、全道的に周知を行うものです。⑥本委員会休止に伴う理事会による事業評価体制の確保。8年度から刷新された新体制の理事会で臨む、道民児連への重要な提案事項です。事業評価の意義を理解し、民児協の活性化へと組織をあげてご尽力いただくために強く希望したものです。

協議後、各委員は6年間の総括として率直に感想と課題、そして期待を語りました。

■コロナ禍での委員会立ち上げの意義

「大きな刺激を受けた」。馬淵一副委員長（道民児連前理事）は、こう振り返りました。特に、

コロナ禍で思うように地域活動ができない状況で、委員会では「こうあるべきではないか」という活発な議論を重ね、「緊迫した状況のなかでの活動の柱と方向性を提案し築いてきたことに大きな意義を感じた」といいます。

また、「民生委員の一人として思うところを十分に言い尽くせない部分もあった」と省みながら、一方で「委員会での議論

から多くの学びや気づきを得た」といいます。今回の改選後は「地区支部長に降任し一区切りつけて、副支部長として関わります。そうして委員会を取り組んできたことを、これからもできる形で進めていきたい」と抱負を語りました。来年迎える百周年事業にも、委員会で培われた趣旨が生かされていくことに期待を寄せ、「この検討委員会は本当に良い形で進められてきた」と感謝の言葉で締めくくりました。

■住民支え合いマップは大切な道具です

松田尚美委員（富良野市民児協会長）は「一人の民生委員として活動しているだけでは得られない貴重な経験だった」と振り返ります。これまでは研修を受ける立場だったのが、この委員会では「どうすれば分かりやすく伝えられるかを考える側として関わり、大きな学びとスキルアップにつながった」といいます。

「住民支え合いマップ」の実践者として委員会に参加したものの、もっと多くの民児協に広

げたかったといえます。「支え合いマップは活動を支える大切な道具でもある」と、その価値を伝え切れなかったことに悔しさをにじませました。一方で、富良野市民児協の仲間とともに研修や視察の受け入れを重ね、その実践が道民児連への「視察研修の体系化」提言につながったことは、大きな喜びだったといえます。

さらに、休会後の今後に向けて、「委員のスキルアップだけでなく、組織としてのあり方も考えてほしい」と提言。日々、住民のために奔走する委員一人ひとりの立場や思いを尊重し、困った時には組織がしっかり支えてほしいとの訴えは、深い共感を覚えるとともに最も尊重すべき意見でした。

また「この委員会は、自分自身のあり方を見つめ直す大切な場所だった」と述べ、一人の人間としてのあり方や生き方を問われた機会であったことに感謝を込めていました。

■地域福祉の推進に欠かせない民生委員に期待する

藤江紀彦委員（登別市社会福

●検討委員会による答申実績

令和2年6月1日	民生委員児童委員研修のあり方に関する検討委員会設置
令和2年8月19日	・中間答申
令和3年1月22日	・答申
令和3年6月1日	民生委員児童委員協議会のあり方に関する検討委員会設置
令和4年4月22日	・中間答申
令和5年4月1日	民児協のあり方検討委員会設置
令和5年4月25日	・令和5年度市町村民児協活性化事業モデル指定民児協選考結果
令和5年7月26日	・令和5年度中間答申
令和6年3月28日	・令和5年度答申
令和6年4月24日	・令和6年度市町村民児協活性化事業モデル指定民児協選考結果
令和7年3月12日	・令和6年度答申
令和7年4月28日	・令和7年度市町村民児協活性化事業モデル指定民児協選考結果
令和7年8月19日	・令和7年度中間答申
令和8年3月24日	・令和7年度答申

社協議会常務理事)は、社会福祉協議会の立場から委員会に参画する中で、地域福祉を取り巻く厳しい現状を改めて実感したといっています。

現在、国は「地域共生社会の実現」を掲げ、福祉政策を自治体の責務として進めています。しかし地域による福祉格差は広がり、「何もできない自治体」が増えています。懸命に取り組む地域だけが福祉を維持している実情があると厳しく指摘しました。

「住民とともに地域をどのようにつくっていくのか」を考えた時、民生委員の存在は中心的な役割を担っていると強調します。「誰一人取り残さず支える仕組みをつくり、不幸な思いをしている人を見逃さず、地域の課題として声を上げていく。それこそが今求められている。それを日々体現しているのが民生委員の活動だ」と、民児協との連携を深めながら「福祉でまちづくり」してきた協働の意義を語ります。

また、道民児連には研修や専門的な情報を学ぶ機会が多くあります。これについて「忘れてはいけないのは、民生委員児童

委員信条にある“隣人愛”の精神だ」と指摘しました。知識や制度だけでなく、「支え合う思い」を大切にしながら活動を続けてほしいという熱いエールです。

さらに、これからの道民児連の重要な役割は「民生委員がやりがいを持って活動を続けられる地域づくりを支えること」と述べ、「北海道の民生委員が、これからさらに元気になっていくことを期待しています」と締めくくりました。

### ■「北海道らしい民生委員活動」の創造への道標

篠原辰二委員(一般社団法人

ウエルビーデザイン理事長)は、民生委員を支援するための研修や事業展開のあり方について、長年にわたり真剣に議論を重ねてきたことについて、「この場がなければ、ここまで深い議論はできなかつたのではないかと、その意義を語っています。

道民児連は従来現場中心であるがゆえに、どうしても日々の活動への対応に視点が向きやすい傾向があるとしながら、この委員会では「もっと先の未来を見据えた議論」が行われていたこ

とが印象深いといっています。とりわけてオンライン研修やサロンの開催、各種手引きやハンドブックの作成・改訂など、時代に即した新たな取り組みが進められたことは大きな成果だったと評価しています。

また、委員会が休会となった後も、理事会などを通じて、現実を踏まえつつ未来を見据えた協議が継続されることに期待を寄せました。その上で「内部組織だけで、第3次北海道民生委員児童委員活動指針の進捗状況や成果を客観的に評価できるのが課題だ」と指摘し、答申内容の効果や成果を検証できる場の必要性を訴えました。

さらに、道外の民児協研修で講師を務める中では、「テーマ設定に十分な根拠や筋道がないまま研修が企画されているケースも少なくない」と指摘します。例えば「災害に関心があるから災害研修を行う」といった短絡的な発想にとどまる実態に疑問を呈しました。しかし道民児連では、さまざまな調査や分析を通じて現状や課題を把握し、エビデンスに基づいて事業や研修テーマを組み立ててきました。その積み重ねこそが「北海道ら

しい民生委員活動」を支えてきた揺るぎない実績そのものだと評価しました。

最後に「これからも北海道ならではの民生委員活動を展開していくってほしい」と期待を述べ、「いまさらだけど、民生委員は北海道の人口比ではどのくらいなのか調べたら0・33%、札幌は0・3%です。すごいですね。道民の0・33%を支援している機関ですよ。道民児連ってすごい公益財団法人ですね!」と感嘆しました。

### ■今後も民生委員への理解と支援を

長谷川稔常務理事は、6年間にわたり尽力いただいた委員へ深く感謝の言葉を述べました。そしてこの間、11回に及ぶ答申を重ね、提言をもって事業の見直しや新規事業にも取り組み、多くの成果をあげたことを評価しました。委員会は一時休会となりませんが「あり方の検証や研究が終わるわけではない」とし、今後議論を継続していく考えを示しました。さらに「道民児連は民生委員活動を専門に支援する団体として、社会的福祉的

役割を果たしていきたい」と、引き続き委員への協力を呼びかけました。

### ■民生委員は「福祉と人」のあり方を問い続ける

委員会は対応力と信頼性、そして先駆性を高めていくことを大切にしながら、「九千人を超える民生委員を支えずして道民児連の存在意義はない」と常に問いかけ、断固とした想いをもって臨んだ委員会でもありました。

筆者もこの6年間は、民生委員の人となりとして活動を深く学んできました。そして人としての生き方を問い続ける姿に襟を正され、「福祉と人」のあり方を教示されました。

全道の各地域で今日も汗する方々が誇りと自信を持っていきいきと活動されますよう、委員一同熱いエールを贈り続けます。最後に、「道民児連は全国に発信できる実績と実践力を持つ組織である」と確信し、さらなる充実と発展を祈念して、これまで支えてきた委員や事務局スタッフへ深謝して筆を置きます。







喜ばれる人になりなさい

―母が残してくれた、たった一つの大切なこと―



永松 茂久 著  
すばる社  
1,760円(税込)

■ 内容

「二期、母の長電話がいやだった。今、母と長電話をしたい」。トビラを開くと現れるこんな「つぶやき」を目にした途端、胸の奥をきゅっと締め付けられる人は少なくないはず。小学生の時に近所のためこ焼き屋を手伝った経験から、わずか3坪のためこ焼き屋を始め、2年後には年間1万人が訪れる大繁盛店「ダイニング陽なた家」を開業した筆者は、著名なインキュベーターであると共に、コンサルタントや人材育成もこなす注目の若手実業家です。

大活躍する著者の原点は、幼いころ、母から送られた、たったひとつの言葉だといえます。それは「喜ばれる人になりなさい」。この短い言葉に基づいた著者のこれまでの歩みが、エッセイの中に記されています。

Aーに象徴されるニユーラルネットワークがこれからの社会の脊柱となることは、もう疑いようのない事実です。人工知能は膨大な学習データから、様々なバイアスまでも計算し、限りなく正解と考えられる解答を提示してきます。しかし私たちが高度なリテラシーとたしかかな倫理観を維持し続けなければ、Aーはやがて合理性だけに支配された味気ない社会を映し出すでしょう。

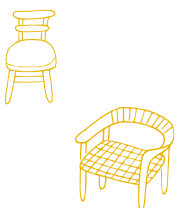
そう、倫理こそ、私たちが未来へとつなぐべきものです。喜ばれる人になることは、関わる人々を幸せにすることです。たとえビジネスの世界でも、この基本原則を忘れたならば、そこに成功はありません。私たちが私たちにらしいやり方で、誰かに幸せを届けること。著者の母の言葉をなぞれば、忘れがちだった基本原則にきつと立ち返ることができるはずです。

エッセイ



19 長丁場もなんのその

鳥居 一頼



ふだんならきつと眠気に襲われたらんらんとする目と頭にしじられるのぞんだ学びに時間は足りなかった

もどかしかった日々の活動

要領を得ないまま追われた対応  
生真面目ゆえに気負う責任

6 時間に及ぶ長丁場の研修だった  
悩みも不安も洗い流されてゆく  
詩編の言葉が心を前に向かせる

仲間との詩を通した語り

触発され静かに振り返る対話  
よき出会いと果たすべき役割の確かめ

民生委員だからこそ己と対峙する  
対等な関わりづくりの深さを見つけた  
思慮と経験値が素直に言葉を放った

テーマと向き合い活性化するグループ  
真剣さの中で味わう打ち解けた談笑  
これからの生き方と活動へのギアチェンジ

支え合う仲間の再認識の機会となった  
築き合うきずなの再構築の場となった  
認め合う仲間との再出発の時となった

学び合うことの意義を体現した  
求めていた学びの本質に触れた  
そして明日への元気を分かち合った

【筆者紹介】

鳥居 一頼(トリーカズヨリ) 詩人。1949年生、登別市出身、北海道教育大卒。道内で18年間教壇に立つ。道教委、道庁などに勤務し、胆振管内で小学校校長歴任後、関西の私立大学に教授で招聘される。現在、登別市社協のきずな大使、空知管内月形町社協のアドバイザーとして、20年に渡り地域福祉実践計画の推進を支援する。社会福祉法人北海道友愛福祉会友愛学会担当理事。2020年民生委員新任研修のテキストとして、詩集『情緒は私を支配する。論理よりも強く』、23年詩集『こころ耕しこころ紡ぐわたしになる』、26年詩集『わたしが必要とされる理由』(三集全て道民児連刊)を教材化した。道内外で、詩をもちいた斬新な研修スタイルが評価されている。